



天然水の切り出し（長瀬町）

かわはく No.70

CONTENTS

開催予告：令和3年度テーマ展「天然水」	2
学芸員コラム「秩父産川海苔 献上の記録」	4
学芸員コラム「かわはく」の対岸で船水車が稼働していた！	5
開催報告：世界土壌デー記念「土でアート作品づくり」	6
お散歩中に探してみよう！II：湧水の話	6
おうちでも「チリメンモンスター」にチャレンジ	7
埼玉のごちそう紹介「秩父の伝統食 ツツッコ」	7
イベント情報コーナー 4・5・6・7月	8



開催予告

令和3年度テーマ展 天然氷

開催期間: 令和3年4月29日(木・祝)～6月20日(日)
会場: 本館第2展示室

1 天然氷の歴史

かき氷イコール夏のものというイメージが強いのですが、最近は天然氷を使ったかき氷の店が増え、夏以外の季節にもにぎわいを見せています。

その天然氷の歴史を、文献資料によって遡ってみることにしました。すると、氷の初出資料は、なんと奈良時代に書かれた『日本書紀』の氷室の記述なのです。その当時、氷室に保存された氷がどのように使われたのかは不明ですが、その後平安時代になると、貴族が真夏に氷を口にした様子が『枕草子』や『源氏物語』に記されています。

やがて江戸時代、氷は地域によっては庶民の手に届くまでになりました。

2 埼玉県内の製氷今昔

例年1月半ば、長瀬町の山中にある水池で天然氷の切り出し、というニュースが真冬の風物詩のごとく伝えられます。作業をしているのは皆野町の阿左美冷蔵(株)の人たち。新聞やテレビで紹介されるのは切り出し当日の様子だけですが、話を聞いてみると、そこに至るまでの準備と水の管理がとてつもなく大変なことがわかりました。そこで、現地に何度も通い、作業をビデオで記録して展示会場で流すことにしました。

最初の作業は10月中旬、1年の間に腰丈まで伸びて池の周囲を覆っていた雑草の草刈りでした。その後、2つの水池の内部を入念に洗い、ひび割れを修復し、水張りとし水抜きを繰り返します。

12月半ば以降はひたすら凍結を待つわけですが、その間も表面にゴミや雪がたまらないよう、日々の管理作業が欠かせません。冷え込みが続いて氷



氷の切り出しは時間との戦いでもある

の厚さが15cm近くなると切り出しとなります。切り出した氷塊は中型トラックで氷室まで運びます。1日に何往復もし、それが2日と半日続きました。

県内で現在でも天然氷を作っているのは、ここにあげた阿左美冷蔵(株) (皆野町) だけですが、過去に遡ると、各地で製氷していたことがわかりました。菊池健太氏の著書『天然氷の歴史と今』(2006年)には多数の水池が紹介され、今回のテーマ展でも大変参考になりました。さらに県立文書館の収蔵資料や地元の伝承などを加えたところ、秩父地方だけでも17か所に及び、そのすべてを現地確認することができました。平野部でも製氷は行われ、東松山市や伊奈町での製氷記録が残っていたのは驚きでした。明治31年には、当館の目の前を流れる荒川の河川敷で製氷したいとの申請書が、内務大臣あてに出されているのも確認できました。

展示では、当時の古写真や水池の図面を紹介します。今では考えられないような場所で天然氷が作られていたことを知り、改めて地球温暖化を実感したものです。



ひび割れの修復にモルタルを塗る



横瀬川で行われていた製氷作業
(1961年 堀口英昭氏撮影)



3 県外の製氷－軽井沢－

現在、天然氷というと栃木県の日光が知られていますが、過去には北海道と長野県が全国的にみると氷の生産量では群を抜いていました。本展では、そうした中から長野県の軽井沢を取り上げてみました。避暑地として有名な軽井沢ですが、特に信越本線が開通してから製氷業が一気に盛んになりました。軽井沢駅と中軽井沢駅周辺には多数の水池が作られ、できた氷は東京方面に出荷されました。

軽井沢は文学者に好まれた土地でもあります。堀辰雄が氷室について触れた随筆の自筆原稿と氷室前での記念写真、室生犀星が軽井沢の水を詠った詩碑などを、製氷場の写真や当時使われた製氷道具とともに展示紹介します。

4 氷の利用

氷は食べるもの、もしくは飲み物を冷やすものと思っている方が多いのではないのでしょうか。「天然氷の歴史」で書いたように、古代から近世までは、氷は夏場に口にした「いと珍しきもの」でした。しかし、近代（明治時代）になると、氷は主に「冷やすため」に使われました。特に養蚕が盛んになると、1年のうちに何度も養蚕を行うために蚕種（蚕の卵）を冷蔵する必要がありました。蚕種の貯蔵には自然の風穴が利用されましたが、氷を使った貯蔵施設も各所に設けられ、大量の水が消費されたのです。

一般家庭では、氷は急病人の熱冷ましに必要なものでした。氷の塊を買ってきて砕いて使ったもので、そのために氷枕（水枕）や氷のうが常備されていました。

電気冷蔵庫が登場する以前は、氷で冷やす冷蔵庫がありました。肉や魚の保存に使われたものですが、大正時代にはすでに機械製氷も盛んに行われていたので、天然氷と機械氷が併存していたようです。



カンナのような初期の氷削り器
(細島雅代氏撮影)

5 献氷の神事

献氷とは、夏まで保存した天然氷を、神や朝廷に献上すること。全国には氷室神社と称する神社が6社あり、そのうち奈良市と天理市の氷室神社では、毎年献氷祭が催されています。さらに天理市の福住地区では、古代の氷室を復元して氷を保存する「福住氷まつり」も続けています。

また、群馬県の草津温泉では「氷室のふるまい」、金沢市の湯涌温泉では「氷室開き」を毎年行い、いずれも天然氷が重要な役割を果たしています。特に後者の祭りは、江戸時代に加賀藩が徳川将軍に雪氷を献上していたことに由来するものです。

展示では、各地に伝わるこうした祭り行事を写真で紹介します。



復元氷室の前での氷まつり
(天理市観光協会提供)

関連イベント

①天然氷を切ってみよう！

- ・日時－5月3日（月・祝） 11：00～12：00
- ・内容－氷鋸を使って天然氷を切る体験です。
(氷がなくなり次第終了)

②天然氷切り出しの思い出を語る

- ・日時－5月23日（日） 13：30～15：00
- ・内容－かつて横瀬川で天然氷の切り出し作業に携わった加藤喜男氏（秩父市在住）に、当時の作業や天然氷の利用について語っていただきます。
- ・定員－70名（事前申込み）

③展示解説

- ・日時－4月29日（木・祝）、5月30日（日）、6月5日（土）
- ①11：30～ ②14：30～（各回30分）
(研究交流部 大久根 茂)



“秩父産川海苔”献上の記録

川海苔は、関東から九州の河川の上流部に生育する淡水藻です。夏から秋にかけて採取したものを干して食用とし、有名な産地では芝川苔（静岡県）や大谷川苔（栃木県）などと川の名を冠した呼び名もあります。一方、荒川水系の川海苔は、地元でのみ消費され、広く知られることはありませんでした。それゆえ、生育地などの情報は、近年になってからのものがほとんどです。

企画展に向けた資料調査の中で、県立文書館の収蔵資料検索システムによって、埼玉県行政文書（重要文化財）の中にある記録を見つけました。そこには、大正2、3年に宮内省へ秩父産川海苔が献上された下記のような経緯が記されていました。

大正2年1月、県知事は宮内省から秩父郡産川海苔の調達を求める電話を受け、秩父郡長へ生産調査を依頼します。調査の後、集めた川海苔を翌2月に青山離宮へ献上しますが、生産時期に再度献上を求められ、同年8月再度秩父産の川海苔を

日光御用邸へ届けました。さらに、翌大正3年8月、川海苔の献上願を提出しています。

宮内省への献上は、当時大きな出来事だったと考えますが、現在のところこの出来事を知っている人は見つけられていません。

献上の事実は大変興味深いものですが、生産調査の結果や献上枚数が記載されていることも、この記録を貴重なものとしています。産地として、大滝村（現秩父市）と名栗村（現飯能市）が、採取場所としてそれぞれ大血川と名栗川が挙げられています。私が知る限り、この記録は荒川水系の川海苔の資料として2番目に古いものと言えます。

また、記録の中には、大正2年8月の干ばつによる川海苔の不作、同8月26日の暴風雨による各地の出水についても触れられています。

様々な情報を読み取ることができ、記録を残す重要性を改めて感じさせられる資料です。

（研究交流部 三瓶ゆりか）



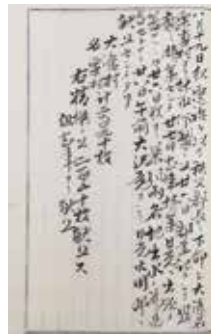
大正2年2月8日の記録
自家用の川海苔が合わせて108枚残っていたとある。



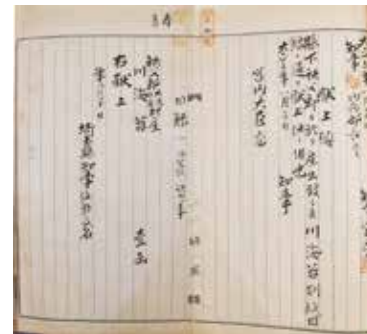
大正2年8月23日の記録
干ばつのために生育不十分とある。



大正2年8月21日の記録
採取場所として名栗川と大血川が記載されている。



大正2年8月の記録
暴風雨による献上の日程変更が記載されている。



大正3年8月19日の記録
大滝村と名栗村産の川海苔の献上を願い出ている。

画像はすべて埼玉県行政文書（埼玉県立文書館所蔵）



ふなすいしや 『かわはく』の対岸で船水車が稼働していた！

「船水車」というものをご存じでしょうか。水車船・船車とも言われ、小舟の上に水車小屋をのせた変わりものです。川の水位が上下しても対応でき、増水のときは安全な場所に移動できるため、昭和10年代まで荒川の中流部では多数の船水車が稼働していました。調べてみたところ、船水車があったのは荒川以外では利根川（支流の烏川を含む）と、静岡県得天竜川、愛知県の本曾川と矢作川だけのようです。使用目的は主に製粉と精米ですが、矢作川の場合は紡績のためでした。

当館の常設展示室には、この船水車の実物大模型が展示されています。模型と言っても精巧に作られ、センサーが人の動きを感知すると水輪が回り、内部の石臼が作動します。

下の写真は、当館のやや下流の荒川左岸に設置されていた船水車です。遠くに登谷山から釜伏山にかけての山並みが見え、船水車の真後ろあたり（荒川右岸）が当館のある場所と思われます。

このような船水車を営業するには、県知事を通じて国（内務省）に水面使用の申請を行う必要がありました。県立文書館所蔵の埼玉県行政文書（重要文化財）の中には、船水車の申請・許可に関する文書が多数あり、荒川関係が36通、利根川関係も11通確認できました。その中で目にとまったのが、明治36年（1903）に花園村大字小前田の鈴木又十郎が申請した際の文書でした。

花園村は現在深谷市になっていますが、小前田は当館の対岸にあたる地区です。申請書には詳細な図面がつけられ、設置場所は荒川左岸にある「行人岩ト称スル堅固ノ巖石」から申の4度の方角（西



船水車の設置申請書につけられた図面
（県立文書館所蔵）

南西）に151間（約275m）とあります。図は南が上になっており、荒川は右上から左下に流れています。川の右岸側に「鉢形村大字小園境」と記してあるので、右岸側に流れ込んでいる支流は、当館わきを流れている塩沢川でしょう。図面では右上端の左岸側が設置位置になっており、そこはまさに当館の真正面にあたる場所なのです。

そこである日、勤務の合間に対岸に行ってみました。行人岩があったと思われる場所は開発されて当時の面影はなく、この岩の存在を知る人にも出会えませんでした。しかし、鈴木姓の家を探したところ、3軒めで申請者である鈴木又十郎のご子孫というお宅に行き着くことができました。孫にあたる吉夫氏が、90歳ながら健在でした。当家の船水車については早くやめてしまったので記憶にないとのことでしたが、かつて小前田の河原には3艘の船車があり、左の写真はそのうちの1艘とのこと。当時の思い出話に花が咲き、船水車の中で遊んだこと、増水時には近所の衆の力を借りて船を移動させたことなど、興味深い話を聞くことができました。

（研究交流部 大久根 茂）



小前田の船水車（当館所蔵写真）



開催報告

かわはくであそぼうまなぼう 世界土壌デー記念「土でアート作品づくり」

開催日：2020年12月6日(日)

12月5日は国連の定めた世界土壌デー。私たちが生きていくために欠かせない土について関心をもってもらおうという日です。このイベントは、色の異なる4つの土を使って絵を描くことで、土の色や手ざわりの違いを楽しみながら感じることを目的に企画しました。

まずは小川和紙に鉛筆で下絵を描き、パネルに貼ります。土は乾燥させたものを予め細かく砕いておいたものを絵の具のように少しずつ水にときながら筆を使って色をつけていきます。子供たちからは赤や黒の土を見て、「こんなに色がちがうんだー」という声も。最後に乾いても土ができるだけ落ちないように、薄めた木工用ボンドを吹き付け、パネルの縁に飾りをつけて出来上がりです。

土は東京の土（黒）、園芸用の田んぼの下の土（茶）、沖縄の土（黄）、長崎県の土（赤）を使用しました。関東の地表面には、黒い土と川沿いの灰色っぽい田んぼの土が多く、赤い土はあまりありません。身近な土はどんな

土でしょう？ ちょっと調べてみてはいかがでしょうか。



会場の様子と
参加者の作品



(研究交流部 森圭子)

お散歩中に探してみよう！ II：湧水の話

『かわはくだより68号』で、学芸員目線での散歩中の楽しみ方を紹介する特集が組まれていましたが、今回はその続きのお話です。

写真を見てください。この写真は埼玉県飯能市の住宅地内を散歩中に撮影した写真です。道路の脇が濡れています。「濡れています」というよりは、「水が流れている」ようにも見えます。

写真左上側がハレーションを起こしているのを見てもわかるように、この日は雨が降っているわけでもなく、また写真を撮影したのは梅雨の時期ではなく真冬なので、連日雨が降っていて、この日だけ晴れたというわけでもありません。

ではどうして地面が濡れているのか？じつは、これはれっきとした湧水なのです。「湧水」と聞くと、名のある名水をイメージする方もいらっしゃるかもしれませんが、多くは特に名前もなく、崖下等から湧いている場所が多くあります。この写真の湧水も特に名前がついているわけではありませんが、確かにこの場所から湧いて出ている湧水なのです。

これら名もなき湧水の中には、飲み水や生活用水としてではなく、貴重な農業用水として、周辺の田畑を潤していたものもあります。

普段、家の近くを歩いていて、雨も降っていないのに毎日地面が濡れている場所はありませんか？不思議に感じた人はいらっしやいませんか？そんな場所が、全部が全部というわけではありませんがじつは湧水が出ている場所なのです。特に崖下でいつも濡れている場所は要チェックです。名もなき湧水の姿を見ることができるといいかもしれません。

(研究交流部 羽田武朗)





おうちでも「チリメンモンスター」に チャレンジ

「チリメンモンスター」とは、ちりめんじゃこの中に入っている小さな生き物たちのことです。略してチリモンと呼ばれています。チリモンには、いろいろな魚の稚魚、タコやイカ、貝の仲間、エビやカニなど、たくさんの種類があります。大阪府岸和田市のきしわだ自然資料館から始まったチリモン探しのワークショップは、楽しく安全に様々な海の生き物を学ぶことができ、全国の博物館や科学館などに広がっています。

当館は海のない埼玉県ですが、海の生き物にも興味を持ってもらうことを目的にたびたびチリモン探しのワークショップを実施しています。ワークショップでは教材用のチリモンがたくさん混ざっている特殊な材料を使用していますが、お店で売っているちりめんじゃこから数少ないチリモンを探し出すのが本来の楽しみです。ちりめんじゃこは鮮魚店、スーパーの鮮魚コーナーで手に入りますので、いつでもおうちでチリモン探しができます。特別な道具や薬

品もいらず、終わった後はおいしく食べられます。

見つけたチリモンは白い紙の上に置いて、スマホなどで写真に撮って記録しておくことをお勧めします。パッケージから日付や産地、購入したお店のメモと一緒に写真に収め、コレクションにすれば自由研究にも活用できます。

お店で手軽に入手できるちりめんじゃこから「お宝」のチリモンを探してみたいかかでしょうか？

参考URL チリモン図鑑 <http://www.chirimon.jp/>

(研究交流部 藤田宏之)



埼玉のごちそう紹介「秩父の伝統食 ツツッコ」

みなさんは秩父の郷土料理と聞くと何をイメージしますか？ この記事を読んでいるみなさんの中には、うどんを思い浮かべた方もいらっしゃるかもしれません。うどんの原料である小麦は、傾斜のきつい畑でもよく育つので、山地が多い秩父では小麦は盛んに栽培されていました。なので、秩父の郷土料理には「おつきりこみ」という煮込みうどんや、「あずきねじ」というあずき餡をからめたうどん料理があります。

ここで紹介する「ツツッコ」は、麦の取り入れや脱穀と養蚕が重なる農繁期に作られていた料理です。「ツツッコ」は、小鹿野町両神から秩父市吉田にかけての西秩父地域の伝統食で、写真のようにトチの葉に包んで作ります。トチの葉には、防腐効果があるといわれていて、忙しい時期のお勝手手間を省くのに重宝されていました。このように郷土料理は、その地域で盛んに栽培されていた作物や、人々の知恵が詰まった食べ物でもあります。みなさんも郷土料理から昔の人の生

活に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

最後に作り方をご紹介します。大きなトチの葉を二枚重ねにして、その上に一晩水につけてから、ざるに上げたもち米・うるち米、キビ、煮ておいした小豆を合わせたものをスプーン2杯分のせます。これを包みこんで、シュロ（またはスゲ）の紐で固くしばります。最後にセイロに入れて塩を少々振り入れ、40分から50分蒸したら完成です。

(研究交流部 室井美穂)



ツツッコ作り (小鹿野町藤倉 守屋家)

2021

4月

1/23/土~4/18/日

春期企画展「海苔・川苔・のりりり！」

2/9/火~6/20/日

スロープ展「水の中の植物 藻類」

4/29/木・祝~6/20/日

テーマ展「天然氷」

4/日

かわはくであそぼう・まなぼう「かわはく桜マップづくり」

時間：13：30～15：30
内容：かわはく内の桜をめくり、ウォークラリー形式でマップを作ります。

17/土

かわはく体験教室「光る泥だんごづくり」

時間：13：30～15：30
定員：15名 参加費：300円（材料費）☎
内容：粘土の多い土を使って泥だんごを作ります。

18/日

かわはく研究室「オタマジャクシを観察しよう」

時間：13：30～15：30
内容：早春に産卵するカエルのオタマジャクシを観察します。複数種を比較し、その生態や卵の違いなども解説します。

25/日

荒川セミナーⅠ 川を知るウォーキング

「高麗川・越辺川を歩く1」
時間：10：00～16：00（予定）
定員：20名 参加費：300円（保険料・資料代）☎
内容：高麗川・越辺川流域に残る、霞堤を含めた旧堤の見学をします。

29/木・祝

テーマ展「天然氷」展示解説

時間：①11：30～ ②14：30～（各回30分程度）
内容：テーマ展の展示解説をします。

6月

6/24/木~9/26/日

スロープ展

「特別サテライト 生き物のすみかを探そう」

5/土

テーマ展「天然氷」展示解説

時間：①11：30～ ②14：30～（各回30分程度）
内容：テーマ展の展示解説をします。

6/日

かわはくであそぼう・まなぼう

「環境の日記念 水質調べ」
時間：①10：30～12：00 ②13：30～15：00
内容：環境の日にちなみ、バックテストで水質調査の体験をします。

12/土

かわはく体験教室「泥染めに挑戦」

時間：13：30～15：30
定員：15名
参加費：400円（材料費）☎
内容：土を媒染剤にして布を染めます。また、赤い土をすりこんで染める方法も試します。

20/日

かわはく研究室「ミジンコを観察しよう」

時間：13：30～15：30
内容：顕微鏡を使って、水の中の小さな小さな生き物を観察します。

5月

5/2/日~5/4/火・祝

かわはくGWまつり

時間：10：00～16：00
内容：楽しいイベントを予定しています。
参加費：イベントにより有料

3/月・祝

テーマ展開連イベント「天然氷を切ってみよう！」

時間：11：00～12：00（氷がなくなり次第終了）
内容：氷鋸を使って天然氷を切る体験です。

5/水・祝

かわはくであそぼう・まなぼう

「地質の日記念 ストーンペインティング」
時間：13：30～15：30
内容：荒川の小石に絵を描く体験をします。

12/水

荒川セミナーⅡ 荒川の源流を訪ねる「浦山ダムと新緑の低山歩き」

時間：10：00～15：00（雨天順延）
定員：20名（高校生以上）
参加費：500円（保険料・資料代ほか）☎
内容：浦山ダムの内部を見学し、併せて橋立鍾乳洞など周辺の自然や文化財について散策しながら学びます。

15/土

かわはく体験教室「植物観察しよう」

時間：13：30～15：30
定員：15名 参加費：100円（材料費）☎
内容：かわはくの敷地内で見られる植物を観察します。どんな花が見られるかな？植物でしおりも作ります。

16/日

かわはく研究室「年輪を調べてみよう」

時間：13：30～15：30
内容：木の年輪はどうしてできるのか。年輪を見ると、いろいろなことがわかります。木を切らないで樹齢を調べる方法もあります。

23/日

テーマ展開連イベント
「天然氷切り出しの思い出を語る」

時間：13：30～15：00
定員：70名 参加費：無料 ☎
内容：かつて横瀬川で天然氷の切り出し作業に携わった方に、当時の作業や天然氷の利用について語っていただきます。

30/日

テーマ展「天然氷」展示解説

時間：①11：30～ ②14：30～（各回30分程度）
内容：テーマ展の展示解説をします。

7月

7/10/土~8/31/火

特別展「すみか～身近なすみかを見てみよう～」

4/日

かわはくであそぼう・まなぼう

「川の日記念 セタかざりづくり」
時間：①10：00～12：00 ②13：00～15：00
内容：川の日を記念して、セタかざりを作って荒川大模型173に飾ります。

17/土

かわはく体験教室「竹の水鉄砲づくり」

時間：13：30～15：30
定員：25名
参加費：200円（材料費）☎
内容：竹を使って手作り水鉄砲を製作します。

18/日

かわはく研究室「鉱物クイズ」

時間：13：30～15：30
内容：埼玉県内で産出される鉱物を当ててもらいます。

23/金・祝

特別展「すみか」展示解説

時間：①11：30～ ②14：30～（各回30分程度）
内容：特別展の展示解説をします。

25/日

「かわはく夏まつり」

時間：10：00～16：00
内容：楽しいイベントを予定しています。
参加費：イベントにより有料

30/金

モノづくりを楽しみながら学ぶ「越生うちわづくり」

時間：①10：30～12：00 ②13：30～14：30
定員：各回12名
参加費：1,200円（材料費・講師料）☎
内容：埼玉の伝統工芸品を作ろう！県内でただ一人の越生うちわ職人、島野さんと一緒に、手漉き和紙を使ったうちわづくりを体験します。

ホームページでも紹介しています！

<https://www.river-museum.jp>

【お願い】①イベントは諸事情により変更になることもあります。ご了承下さい。②☎印のついた行事は事前申込みが必要です。費用に「保険料」が含まれるイベントの申込締切日は、各イベントの開催日の前日（午前中）までです。③定員になり次第締め切ります。

編集・発行

埼玉県立川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地
TEL/048-581-8739(研究交流部) FAX/048-581-7332
ホームページのフォームからお問い合わせいただけます。

彩の国
埼玉県

2021年3月27日発行

